

聖ペトロ 聖パウロ使徒

第一朗読 使徒言行録 12・1-11
第二朗読 二テモテ 4・6-8、17-18
福音朗読 マタイ 16・13-19

2025.6.29 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日わたしたちは聖ペトロ 聖パウロ使徒の祭日のごミサをお捧げしています。この祭日についての説明を『毎日のミサ』からまず朗読いたします。

「初代教会の中心的な指導者である二人の使徒を祝うこの祭日についての最古の記録は、258年に書かれたものである。使徒の頭であるペトロは、エルサレムをはじめ広く宣教活動を行った。また、初めはイエスの弟子たちを迫害していたパウロは復活したキリストと出会って回心し、異邦人の使徒としてキリストの教えを宣べ伝えた。二人は異なる使命を与えられていたが、「キリストのもとに人々を一つに集め、信仰のあかしのためにともにいのちをささげ」（きょうのミサの叙唱）、ネロ皇帝による迫害の時代（60年代半ば）にローマで殉教した」ということでございます。

聖人たちをお祝いする日には3段階のランクが付けられていて、祭日、祝日、記念日となっています。で、特に聖人たちのお祝いでも教会にとって重要なものは祭日になるわけですが、この祭日に関してのみ、日曜日と重なった場合、その主日のミサよりもその祭日優先してお祝いするっていう、そういう決まりになっているんです。ですので、時々この6月29日、聖ペトロ 聖パウロ使徒の祭日も日曜日に当たりますので——今日もそうなんです——皆さんと一緒に祝いすることができる、そういう巡り合わせの年があるということになります。

さて、今日の福音では、ペトロが弟子たちを代表してイエス様に「あなたはメシア、生ける神の子です」というふうに信仰告白したという場面が朗読されました。でもその場面が「フィリポ・カイサリア地方に行ったとき」というふうに、わざわざ、何処にいた、何処での出来事かということをもマタイによる福音書はわざわざ書いているわけなんです。そこにも一つの意味を見出すことができると思います。

フィリポ・カイサリアというのは、イエス様が生まれた頃にイスラエルの地全土を治めていたヘロデ王が造った町です。ヘロデ王はローマの皇帝によってイスラエルの

全土の王様にしてもらって、その後でこのフィリポ・カイサリア地方——今聖地に観光に行けば大体巡るかもしれません——国の一番北の方の水の豊かな美しい場所ですけども、その地方も自分の領地に加えてもらったってことのお礼に造った町がこのカイサリアなんです。で、その後ヘロデ王の息子のフィリポが自分の領地の都にしてたのでフィリポ・カサリアっていうふうに名前がついてますけども——ちなみに今日の第一朗読に出てきたヘロデ王は別人です。第一朗読の使徒言行録に出てきたヘロデ王は、最初のヘロデ王の孫のヘロデ・アグリッパという人なわけです。

ところで、この地方を自分の領地に加えてもらったお礼にカイサリアという町を造り、その町の中にローマの初代皇のカエサル・アウグストゥスを神様として祭る大きな神殿を造ったんです。だから当時の人にとってはフィリポ・カイサリアと聞けば、アウグストゥスの神殿がある場所っていうふうに——特にマタイによる福音書の最初の読者たちも——ピンと来たと思われるわけなんです。わたしたちにとって、たとえば日光って聞いたら東照宮がある場所というような感じかと思います。で、アウグストゥス、ローマの皇帝を神様として祭っている。

現代のキリスト信者にとって「救い主」とか「神の子」っていう単語を聞いて誰を連想しますかってアンケートすれば、「イエス様」って大体みんな答えると思うんです。また、キリスト信者じゃない人でもキリスト教がそういう言葉を使っているっていうのは知っているので、世界でアンケートを取れば、「イエス・キリストのことでしょう」ってピンとくるかもしれません。でも、当時の地中海の世界の人にとって、「救い主、神の子っていうタイトルを聞いて思い浮かぶのは誰ですか」ってアンケートをしたならば、10中8、9、「ローマの皇帝でしょう」っていうふうに答えるわけなんです。

だからそういう意味で、そんな世界の中にあってペトロや少数の者たちは、ローマの皇帝が救い主で神の子なんじゃなくて、イエス様こそが神の子なんだというふうに信じた。少しだけそういう人たちから信仰が始まったんだということを、今日の福音の箇所は表していると思えます。

だけど、じゃあそれはどういうことかと言えば、お祈りする場所がアウグストゥスの神殿なのかあるいはキリスト教の教会なのか、お祈りする相手の^ま主的がアウストゥスなのかイエス様なのかっていう、お祈りする^ま主的が違うっていうことだけではもちろんないわけです。むしろそこに含まれている「神とは一体どのような存在なのか」って

いう、その理解が決定的に違うんだというのが、福音書がずっと言いたいことだと思います。

アウグストゥスはみんなを支配してみんなを自分の思い通りに動かし、そして名誉も権力も富も自分のところに集める、そういう形で全ての人間を超えているから神だっていう——今の一般的な言い方でなんかね日本でそういう言い方あるかもしれませんが——神だっていう、だから人間が憧れる、自分もそういうふうになりたい、いろんなものを自分のものにして、そしてみんなを自分の思い通りに動かしたいっていう、行きつく先に座しているのがアウグストゥスっていうことになります、

一方のイエス様は、福音の中で何度も語られるし、ミサのたびごとにわたしたちが思い出しているように、他の人が生きるように自分の持っているものを全部差し出す、そういう方なんだ——もちろん持ってるものはもともとないんですけども——、でもいのちも名誉もそして自分の与えられた力も全部、他の人のために差し出す、そういう方だった。で、それが神様なんだっていうのが、「イエス様が神の子、救い主なんだ」っていうその信仰告白の意味していることですね。

だから、お祈りする場所が違うだけではないし、人間の生き方が——じゃどちらの生き方が人間として本来の姿で、そしてわたしたちが目指したいのはどちらかという問いかけでもあると言わなければならないんです。だから、もし「自分がいろんなことを手に入れることができますように、みんなが自分を大切にしますように」っていうことだけをお祈りするならば、お祈りしている場所がたとえキリスト教の教会の中であつたとしても、お祈りしてるのはアウグストゥスに向かって祈っていると言わなければならないかもしれません。

でもペトロをはじめとする最初の弟子たちがイエス様を神の子だって言ったのは、そういうものを本当は大切にするんじゃないんだっていうことにだんだん気づかされていった、その神の恵みの結果であるということができると思います。

最初はペトロたちもイエス様に対して「あなたは神の子、救い主だ」って言いながらも、その意味していることはっきりは意識してなかったですね。イエス様が自分たちを皇帝アウグストゥスのように——イエス様について行けばいろんなものが得られるって期待していたと思われる。福音書はこの信仰告白の後、だんだんにイエス様

がしたいことと弟子たちが期待していることが大きくかけ離れていっているっていうことを明らかになっています。

でも最後この弟子たちは、今日の祭日がお祝いしているように、神様の恵みによって変えられて、イエス様のように他の人のために自分を渡す、そういう者になった。それは、今日のイエス様の言葉でもあるように「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」。神様の恵みが働くならば、わたしたちは変えられて。自分の中にいろんなものを集めたいというのではなくて、渡すことが喜びになっていく。わたしたちも自分の心を見たときに、もう 99%は自分の中にいろんなものを集めたい——物だけじゃなくて、人の評価とか愛情とか。だけど渡したいっていう思いが 1%でもあるし、その瞬間が人生の中で誰かのために見返りを求めずに何かをするっていうことがあると思うんです。それこそが神様の恵みが働いている瞬間として、やっぱり神様に感謝することができるのではないかと思います。

今日、祭日、ペトロとパウロがすごいわって褒めたえるのではなくて、ペトロとパウロも最初は違ってたんだ、だけど神様のお恵みで変えられて、イエス様のように他の人を愛し他の人のために自分のいろんなものを渡すことができる人になった、その恵みを神様はわたしたちにもくださるんだという希望を新たに作る、そんな祭日の意味なんだと思います。

今日、使徒たちのことを思い起こしながらお捧げするミサを通して、使徒の取り次ぎのうちに、わたしたちも本当の意味でイエス・キリスト、イエス様を——アウグストゥスじゃなくて——イエス様を「あなたが神の子、救い主だ」って信仰告白するその告白を生きることができますように。人生の中で少しでもその実現をするために神様が絶えず助けてくださる、その希望を持ってこのごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>